

## 京都キリスト召団 降誕節聖書講筵

## 「永遠の生命」を賜って生きる ―― 神・キリスト讃美の生涯を ――

## 詩篇第139篇

2025年12月21日

奥田昌道

祈り 詩篇第139篇 生かそう生かそうという知り方 太陽の光 われ活くれば汝らも活くべければなり なんじ今日われと共にパラダイスにあり 永遠の生命を賜って生きる 神・キリスト讃美の生涯 「ビフォア」と「アフター」 無条件降伏 詩篇第103篇

## ● 祈り

始めに短くお祈りをさせていただきます。

主さま、ありがとうございます。多くの主にある兄弟姉妹たちをこの祈りの家にお迎えいたしまして、今年最後の集会となりますが、こうして皆様と共に聖名を讃え、あなたの豊かな御恵みを讃え感謝することができまことを本当にありがとうございます。

「われ活くれば汝らも活くべければなり」

と、あなたは仰ってくださいました。

「生きよ」

と、あなたは励まして、永遠の生命となって一人ひとりの中に宿っていただきます。主さま、ありがとうございます。天地一如と、先に天界に召された者たちも、今この我々の祈りの集い<sup>つど</sup>を天から見つめ励まし、天地一如の喜びの声を発していただくことを感謝いたします。

主さま、どうぞ、これからのしばらくの一時を、御霊の主さまがこの場に臨在くださいます、一人ひとりと共にあり、うちにあり、そして

「我らは一如なり」

と仰って、天地一如の霊的現実を豊かに味わうことができますように、そして、聖名を讃えることができますように、聖名にあつて感謝してお祈り申しあげます。アーメン。

## ● 詩篇第139篇

よくおいでくださいました。今日の筵題は

「永遠の生命を賜って生きる ―― 神・キリスト讃美の生涯を ――」

と、このようにしました。そして、聖句としていくつかを揚げました。

私が申し上げたいのは、副題に掲げました、「神・キリストを讃美する生涯を」、そのような生き方を貫きたい。それに尽きます。関連する聖句をいくつか並べていただきました。



私たちの生の現実<sup>なま</sup>はどうかといいますと、それは詩篇の139篇を開いていただきたい。私のは文語訳で読ませていただきます。「エホバ」とあるのは「主」と読み替えます。

【詩篇第139篇】 伶長<sup>うたのかみ</sup>にうたわしめたるダビデの歌

1 主よなんじは我をさぐり我をしりたまえり 2 なんじはわが坐るをも立つ  
をもしり又とおくよりわが念<sup>おもい</sup>をわきまえたもう 3 なんじはわが歩むをもわが  
臥す<sup>ふ</sup>をもさぐりいだしわがもろもろの途<sup>みち</sup>をことごとく知りたまえり 4 そはわ  
が舌<sup>はなびら</sup>に一言ありとも観よ主よなんじことごとく知りたまえり 5 なんじは前より  
後よりわれをかこみわが上にその手<sup>て</sup>をおき給えり 6 かかる知識はいとくすし  
くして我にすぐまた高くして及ぶことあたわず 7 我いずこにゆきてなんじの  
聖霊<sup>みたま</sup>をはなれんやわれいずこに往きてなんじの前<sup>みまえ</sup>をのがれんや 8 われ天にの  
ぼるとも汝かしこにいましわれわが榻<sup>とこ</sup>を陰府<sup>よみ</sup>にもうくるとも観よなんじ彼処<sup>かしこ</sup>  
にいます 9 我あけぼのの翼をかりて海のはてにすむとも 10 かしこにて尚なん  
じの手<sup>て</sup>われをみちびき汝のみぎの手われをたちたまわん 11 暗きはかならず  
我をおおい 我をかこめる光は夜とならんと我いうとも 12 汝のみまえには暗き  
ものをかくすことなく夜もひるのごとくに輝けりなんじにはくらきも光もこ  
となることなし 13 汝はわがはらわたをつくり又わがはの胎<sup>おそ</sup>にわれを組み成  
したまいたり 14 われなんじに感謝すわれは畏る<sup>おそ</sup>べく奇しくつくられたりなん  
じの事跡<sup>みわざ</sup>はことごとくすしわが靈魂<sup>たましい</sup>はいとつばらに之をしれり 15 われ隠れ  
たるところにてつくられ地の底所<sup>そこへ</sup>にて妙<sup>たえ</sup>につづりあわされしときわが骨なん  
じにかくることなかりき 16 わが体<sup>むくろ</sup>いまだ全<sup>まった</sup>からざるになんじの目<sup>め</sup>ははや  
くより之をみ日々かたちづくられしわが百体の一だにあらざりし時にことごと  
くなんじの冊<sup>ふみ</sup>にしろされたり 17 神よなんじのもろもろの思念<sup>みおもい</sup>はわれに宝き  
こといかばかりぞやそのみおもいの總計<sup>すべくくり</sup>はいかに多きかな 18 我これを算<sup>かぞ</sup>え  
んとすれどもそのかずは沙<sup>すな</sup>よりもおおしわれ眼さむるときも尚なんじととも  
におる…… 23 神よねがわくは我をさぐりてわが心をしり 我をこころみてわ  
がもろもろの思念<sup>おもい</sup>をしりたまえ 24 ねがわくは我によこしまなる途<sup>みち</sup>のありやな  
しやを見てわれを永遠<sup>とこしえ</sup>のみちに導きたまえ

この詩篇139篇というのは本当に素晴らしい内容だと思って、私は本当にこれに感動する  
んです。人間が人間を知るといのは、いい面を知っていただてのこともあるかも知れ  
ないけれども、そうでない面もまた知られてしまう。だから、人間というのはあまり自分  
の内面を人に知られたくないという気持ちがある。

●生かそう生かそうという知り方

ところが、この詩篇でいう主の知り方、神さまが自分を知ってくたさるという知り方は、



そういう粗探<sup>あらさが</sup>しではない。欠点探しではなくて、生かそう生かそうとして、私を知ってくださる。何とありがたいことかと、そういう思いがここに出ているように思う。それが

「あなたは我をさぐり、我を知りたまえり」

ということ。あまり人には知られたくない、自分のこんな弱点は知られたくないという気持ちの人が人間にはみんなあるんですね。できれば、いいところだけ見てほしい。つまり、格好良く見せたい。格好良くありたいと思うんだけど、それに対してこれは、粗探しで知るのではなくて、

「生かそう生かそう、生命<sup>いのち</sup>づけよう」

というポジティブな知り方をしてくださる。

「なんとありがたいことでしょうか」

と、そういう思いがしているように思うんです。それがここに、

「主よなんじは我をさぐり我をしりたまえり<sup>2</sup> なんじはわが坐るをも立つをもしり又とおくよりわが念<sup>おもい</sup>をわきまえたもう<sup>3</sup> なんじはわが歩むをもわが臥<sup>ふ</sup>すをもさぐりいだしわがもろもろの途<sup>みち</sup>をことごとく知りたまえり

「いや、欠点を見つけ出されて、責められるのはいやだわ」

というふうに普通なら思うのが、そうじゃなくて、次にあります、

そはわが舌<sup>うぶ</sup>に一言<sup>ひとこと</sup>ありとも

この「一言ありとも」というのは「一言もなくとも」と読みたい。たとえ一言であっても、

観よ主よなんじのことごとく知りたもう<sup>5</sup> なんじは前より後よりわれをかこみわが上<sup>み</sup>にその手をおき給えり<sup>6</sup> かかる知識はいとくすしくして我にすぐまた高くして及ぶことあたわず<sup>7</sup> 我いずこにゆきてなんじの聖霊<sup>みたま</sup>をはなれんやわれいずこに往きてなんじの前をのがれんや<sup>8</sup> われ天にのぼるとも汝かしこにいましわれわが榻<sup>とこ</sup>を陰府<sup>よみ</sup>にもうくるとも観よなんじ彼処<sup>かしこ</sup>にいます<sup>9</sup> 我あけぼのの翼をかりて海のはてにすむとも<sup>10</sup> かしこにて尚なんじの手われをみちびき汝のみぎの手われをもちたまわん<sup>11</sup> 暗きはかならず我をおおい 我をかこめる光は夜とならんと我いうとも<sup>12</sup> 汝のみまえには暗きものをかくすことなく夜もひるのごとくに輝けりなんじにはくらきも光もことなることなし

人が人を知るというのは、いいところを探そう探そうとして知るよりも、できれば、粗探しというか、

「あまり人にわが内面は知られたくない」

という思いが誰でもあるのではないかと思う。ここでの知り方というのは、そういう欠点探し、粗探しの知り方ではなくて、

「生かそう生かそう、なんとか彼を本当の生命の世界に導いてやろう」

という深い愛がこめられている、そういう知り方だと思っただけです。



「なんじはわが坐るをも立つをもしり又とおくよりわが念<sup>おもい</sup>をわきまえたもう」という。

「いやだわ、そんな私は自分のことをみんな、人に知られたくないわ」

という、そういう思いが普通一般にあるんですよ。ところが、ここはそうじゃない。粗探しではなくて、生かそう生かそうとして、そういう探り方、知り方をしてくれる。

「ああなんとありがたい」

と。これは福音そのものですよ。人は普通、粗<sup>あら</sup>探しが上手なんです。粗を探して喜んでいる。密かな喜びとしている。そういうのが一般世間ではないかと思うけれども、ここは

「生かそう生かそう、何とか彼に本当の喜びを与えてやろう」

という、そういう愛をもつて深く知る知り方。それはまさにキリストさまが私たちのことを知ってくださる知り方、それがそこに描かれているように思うんです。

だから、たとえばどこへ逃げて行っても、そこにもあなたはいてくださって、私をいだき生かしてくださっているではないですか。もうあなたの前からのがれることはできません。あなたは私を捕まえて抱きしめて、そして

「生きろ、生きろ。我活くれば汝も活くべければなり」

と。これは私の好きな言葉ですけれども。ヨハネ伝14章に出ています。そういう知り方をしてくださっている。即ち、この福音そのものなんです。だから、ここでは、

11暗きはかならず我をおおい 我をかこめる光は夜とならんと我いうとも<sup>12</sup>汝  
のみまえには暗きものをかくすことなく夜もひるのごとくに輝けりなんじに  
はくらきも光もことなることなし

と。やけっぱちになって、

「もうだめだ!」

と言つても、あなたにとつてはそんな相対的な光とか闇とか、そんなことは問題ではない。あなたの絶対の愛の光で私を包んで生かしてくださる。

## ●太陽の光

皆さん、お天気の良い日に外へ出たら、太陽が照っていますよね。あの太陽を見て、皆さん、不思議に思われない? 太陽の光が私に届いている。その光が届いて、それに包まれていると、身体が暖かくなってくる。主さまはそういうお方なんです。光をただ思っていて、もだめなんです。光の中へ出ていけば、もうその愛の光で熱で包んで、

「生きろ、お前は生きるんだよ」

と、生命を与えてくださるんです。

「終りのアダムは生命を与える霊となれり」

という言葉がコリント前書の15章(45節)に出ていたと思う。そのように、主さまというのは、



我々を生かそう生かそうとなさってください。そういう知り方。それがここで言われている、

「あなたは私のことを全部知ってくださいていますね」と。

なんじはわが坐るをも立つをもしり又とおくよりわが念をわきまえたもう

3 なんじはわが歩むをもわが臥すをもさぐりいだしわがもろもろの途をこと

ごとく知りましたまえり

という、そういう言葉となつて表れている。たとえば一言もなくとも、あなたはすべてをお見通しだと。すべていいようにいいようにと、生かすように生かすようにと、あなたは私のことを知ってください。

そんな知り方をしてくれる人は普通はいないです。自分が自分を知る知り方でも、

「もう私はあいかわらずそんなところがあつて、本当に自分で自分がいやになる」

という、そういう思いが私はかつて非常にありました。まあいうならば、そういう思いがあつたから、キリストに導いていただいたのかも知りませんが、自信のある人は神さまのところへ来ない、と私は思っている。だめだからこそ、キリストがご自身を現わして、

「心配いらんよ、私がお前を抱きしめているよ」

という、まさにここでの知り方、

「たとえば一言もなくとも、あなたはすべてを知ってくださいっている。前より後よりわれをかこみわが上に愛の手を按いてくださっている。ああ本当に、主さま、ありがとうございます」

という、そういうふうにながつてくる。私はそう思っております。

「天に上るともあなたはそこにいらつしやいます。陰府に逃げて行つてもそこにあなたはいらつしやいます。あなたにとつては暗闇とか光とか、そんなことは相対的なものは問題にならない。絶対的な愛の光で私を包みこんで生かしてやまない。そういう、あなたはお方なんです」

そういうふうには、ここを読んでいただきたい。

われ天にのぼるとも汝かしこにいましわれわが榻を陰府にもうくるとも観よ  
なんじ彼処にいます。我あけぼのの翼をかりて海のはてにすむとも 10 かしこ  
にて尚なんじの手われをみちびき汝のみぎの手われをたちたまわん

朝日がサーッと照つてきたとき、その光がサーッと走っている感じを受けるんですよ、この鴨川なんかで朝日を見ますと。そのようにここで、

11 暗きはかならず我をおおい 我をかこめる光は夜とならんと我いうとも 12 汝  
のみまえには暗きものをかくすことなく夜もひるのごとくに輝けりなんじに  
はくらきも光もことなることなし

という。自然を見てこのように神讃美――我々からいえばキリスト讃美――へとつながつていく。そういう自然との接し方、これは私はキリストによつて救われるまではなかった。



私は正直言つて、山へ行ったり何かして、その自然の壮大さ、雄大さ、美わしき、それを観ると悲しくなった。自分と比較してしまうから。

「ああ、大自然はこんなに素晴らしく輝いているのに、自分はなんともうなだれて、心配事ばかりしている。過去を振り返れば後悔して、将来を思えば心配事ばかりある。現在というものもちつとも充実していない」

と。

「<sup>あした</sup>朝に道を聞かば<sup>ゆうべ</sup>夕に死すとも可なり」

という孔子さんの言葉でしたかね。それがうらやましかった。私は過去を振り返れば後悔ばかり。将来のことを思えば心配ばかりしていた。その二つにはさまれて、現在というものが本当に生きていない。そういう思いで、私は非常に苦しみました。

「この死の<sup>からだ</sup>体より我を救はん者は誰ぞ」

とパウロがローマ書で言ってますように、そのように私も本当に孔子さんの、

「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」

と、あの心境がうらやましかった。そういうところから解き放つて、

「お前は生きるべきだ。お前は生きるんだよ」

と言つて励ましてくださったのが、主キリストさまだったんです。

●われ活くれば汝らも活くべければなり

一足飛びにそうは行きませんでした。これは言つておかないといけない。何となれば、「主さまを知る」

ということは、今までいい加減に自分がやっていたのが、いい加減でなくなるから。そうでしょ。人を誤魔化しても、自分を誤魔化しても、主さまは誤魔化すことはできない。そういうお方に見つめられたら、これはもうたまりませんよね、本当は。ところが、主さまの知り方は、<sup>さば</sup>審く知り方ではなくて、生かす知り方。

「たえお前がどんなにだめなやつでも、私はお前を絶対生かしてやまないよ」

と。それが、

「われ活くれば、汝らも活くべければなり」

という、ヨハネ伝14章に出ている言葉です。御霊のことが、聖霊のことが約束されている箇所です。

「<sup>たすけぬし</sup>われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。<sup>17</sup>これは真理の御霊なり、世はこれを受くこと能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。<sup>18</sup>我なんじらを遣して<sup>のこ</sup>孤児とはせず、汝らに<sup>きた</sup>来るなり。<sup>19</sup>暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば



「汝らも活くべければなり。」(ヨハネ14・16、19)

この19節の言葉です。我々人間というのは、死んだらそれで終わりです。そうでしょう。

「命あつての物種」ものだね

という言葉もありますように、生きている間が華はなで、もう死んだら焼かれてお終い。そういう儚い我々の姿に対して、ここでは

「そうではないよ!」

と言つてくださっているんです。

「われ活くれば汝らも活くべければなり」

と。キリストは

「私は復活する」

と言う。我々の罪を贖あがなつて、そして天国への道を開いてくださつて、

「我は道なり、真理なり、生命なり。誰にても、我によらでは父の御許へ至る者なし。

されど、我によるならば誰でも行けるよ」

という、そういう天国への道を開いてくださつて、そのお方がここに、

「われ活くれば汝らも活くべければなり」

と言つてくださる。キリストだけがそのような生命の道となつて、

「我は道なり、真理なり、生命なり」

というのは、

「お前をこの永遠の世界へ、天国へと連れていく、その私は道となる。その道をお

前は踏みしめて行け」

「私のような人間が踏みしめて行つていいんですか?」

「十字架でお前の罪は全部贖きよつた。だから、お前は潔い。だから、この道を歩け。

この道を歩けるのは、私の贖いを受けた人間だけだ」

と言われる。しかし、

「そんなものは要りません」

と蹴飛ばしている人間はその道を歩くことはできない。けれども、

「主さま、ありがとうございます」

と言つて、その十字架の贖いがありがたく受けとつた人間は、

「我は道なり、真理なり、生命なり。我によらでは父の御許に至る者なし」

と仰つた、

「その父の御許へ、あの天国へとお前を行かせる」

と。それが「我は道なり、真理なり、生命なり」と仰つたキリストのお姿です。我々はどうするか。

「はい、ありがとうございます」



と、それしかないですね。難行苦行して行けるならやってください。そういう人もいます。しかし、私たちはそうじゃない。

「主さま、あなたは『我は道なり真理なり生命なり。我によらでは誰にても父の御許へ永遠の世界へ行くことはできない。我によるならば誰でも行けるよ』と云ってくださった」

ありがとうございますと言うほかはないじゃありませんか。

だから、私は、キリスト教とは何かというと、

「はい、主さま、ありがとうございます」

と言う、そういう人間の生き方をさせてくださるのが、私にとってのキリスト教です。

「キリスト教」なんて、「教」というのは要らんですよ、「キリスト」だけ。生命のキリストさま、そのお方が私に生命をくださった。これが私にとってのキリスト道です。

「我は道なり、真理なり、生命なり。誰にても我によらでは父の御許に至る者なし。我によるならば誰でも行けるよ」

と言って道を開いてくださった。

「いやあ、私のような汚れた人間が、こんなだめな人間でも行けるんですか？」

「いや、だめとか何とか言うな。お前のためさ加減なんかは全部、私が十字架で片付けたんだ」

と。だから、

「私のようなだめな人間が」

と言い張るのは、謙虚にみえて傲慢なんです。キリストの救いを拒んでいるんですから。それに対して、

「主さま、ありがとうございます」

と、それを感謝してお受けする者だけがその道を歩んで行ける。私はそういうふう思う。

### ●なんじ今日われと共にパラダイスにあり

そのことを思うときに、ちよつと想い出すことがある。キリストの十字架の場面です。十字架のまんなかのイエスさまの左右に、それぞれ強盗殺人か何か知りませんが、やはりひどいことをやった人が二人いた。これは小池先生が非常に感動をもってお話くださった内容でしたけれども。

片一方の盗賊は、

「お前はキリストならば、救い主ならば、俺たちを救ってもらおう。救い主だと言いながら何たる態だ<sup>さま</sup>」

と言って、散々キリストを罵<sup>ののし</sup>っていた。それに対してもう一方の盗賊は、

「口をつつしめ。俺たちは自分のやった報いとしてこれが当たり前なんだ。でも、



「このお方はちがうんだよ」と、そう言つて、

「あなたが御国にお入りになるときに、こんな私のようなやつが、どういふご縁か、そばにいたということを想い出してください」

と言つた。「救ってください」とも何とも言つてない。

「自分がこうなるのは当たり前なんです。しょうがないんです、これは受け入れられます。しかし、あなたさまは違います。あなたは光り輝いて天へ昇つていくお方なんです。それがこういう酷い目に遭つていらつしやる。どういふご縁か知りませんが、そういうあなたの十字架のそばにこんな奴が居つたということを想い出してください」

と。この盗賊は、このお方はどういうわけか、こういう十字架を背負つておられるけれども、必ず天国へ昇つて行く、御国にお入りなるお方だということを知つていたんですね。だから、「あなたが御国にお入りになるときに私のようなやつがそばにいたこと、不思議なご縁でそばに居らしていただいたということ、どうぞ想い出してください」

と。「救つてくれ」とも何とも言つてないんですよ。

「どういふご縁か、そばに居た。こんなやつが居つた。それを想い出してください」と、それだけです。そうしたら、

「なんじ今日、我と共にパラダイスにあるべし」

と、キリストは仰つた。いやあ本当に、我々は本来ならば、そういう十字架が当たり前人間かも知れないですよ。けれども、そういう人間だからこそ、救い上げてくださるのは主イエス・キリストさまの十字架の贖いにおいてです。だから、小池先生があつた、

「なんじ今日われと共にパラダイスにあり」

と、キリストが仰つたあそこは本当に自分はあるがたいと思つているというようなことをよく仰つておりましたが、そのお気持ちがよくわかります。それが、

「われ活くれば汝らも活くべければなり」

という、このヨハネ伝14章の言葉とつながっているんです。

「どんなことがあつても、お前を活かさずにはおれないよ。『私のような罪びとが』なんてもう言うな。それは全部私が背負つたから」

と。「私のような罪びとが」と言い張るのは、キリストの十字架の贖いを拒んでいる姿ではないですか。我々が言えることは、

「主さま、ありがとうございます」

ということだけです。



## ●永遠の生命を賜って生きる

何度も申しましたが、「ありがたい」というのは、

「有ることが難しい、滅多にない」

という、唯一絶対なる救いの道を私たちにお示しくださる。それもキリストが十字架にかかって、あのような苦しみを背負ってくださったからこそ、我々に永遠の生命を無条件に与えてくださる。無条件とは、どんなに我々は悪いやつであっても、「主さま、ありがとう」と言っ<sup>ひれふ</sup>て、平伏して感謝して受けとる者には無条件にということですよ。

「お前は過去はこうだった、ああだった。今はどうだ」

なんていうことは仰らない。「ありがとうございます」と言う人間には本当に無条件で天の生命を、新しい生命を与えてくださる。それがここにある、

「われ活くれば汝らも活くべければなり」

と、私は受けとっているんです。つまり、

「お前を絶対に活かさないではおかないよ」

と、そうやって十字架で贖いを終えてくださった。私たちは何ができるか。

「はい、主さま、ありがとうございます。あなたの貴いおん救いを感謝してお受けいたします」

と。それがパウロの告白ですね。

「われ主と共に十字架につけられたり。もはや旧<sup>ふる</sup>きわれ生くるにあらず、御霊のキリストわがうちにありて、われを活かし給うてあるなり」

という、ガラテヤ書2章20節の告白となって表れてきています。私たちも同じですね。

だから、私は今日のタイトル「永遠の生命を賜って生きる」、そして副題として「神・キリスト讃美の生涯を」と書きました。この「永遠の生命を賜って生きる」とは、十字架でこの私の全存在を根底から贖ってくださったから。贖いがないところに永遠の生命は来れないですものね。贖ってくださった。そして、

「永遠の生命をお前にあげるよ」

と言っ<sup>て</sup>てプレゼントしてくださった。それが「聖<sup>ひ</sup>霊の生命」というのかもわかりません。御霊、ということかも知れません。そして、そういう永遠の生命をいただきますと、どのように生きるのか、どのような生き方をするのか。それは

「神・キリスト讃美の生涯を貫く」

ということですよ。「神・キリスト讃美の生涯」というと抽象的かも知れませんが、キリストの十字架の贖いをお受けしなければ、「神・キリスト讃美」ということは出てこないとは私は思っております。キリストが私の一切のマイナスを、過去・現在・未来の一切を贖い切<sup>つ</sup>て、

「お前は活きるんだ、お前は絶対活きるんだ。われ活くれば、汝らも活くべければ



なり」

と仰った、それをキリストが担保し保証してください。それに対して、私が

「主さま、ありがとうございます。どうぞ、あなたの御意にかなう生き方をさせてください。それをさせてくださるのはあなたの御霊です。あなたのおん導きです。」

自分ではありません。主さま、よろしくお願いいたします」

これが私の応答なんです、そうお答えする。だから、

「クリスチャンとは何ですか？」

と問われたら、

「キリストによって活かされているという生き方を貫いている、そういう在り方、それを求め、それを実践しようとしている人間がクリスチャン、キリスト者、クリスト信徒」

といえるかも知れません。それは全部、キリストご自身がなさってくださいるキリストの御業<sup>みわざ</sup>なんです。自分から出てくるものではないと、私は自覚しています。私のできることは、神・キリスト讃美を貫くこと、キリストの心を心として生きていくこと。それはピリピ書2章に出てきていますね、

「汝らキリストの心を心とせよ」

という。そのように、キリストに導かれた、キリストの心を心とする生き方を貫いていく。それを別な言葉でいえば、「神・キリスト讃美の生涯を貫く」ということになります。それが今日の筵題に使いました、「永遠の生命を賜って生きる」、副題として「神・キリスト讃美の生涯」ということであり、私の思いを表したわけです。

結論的なことを申しましたけれども、どうしたらそういうふうになつていくんでしょうか。それがさっきの詩篇139篇が我々の生の現実<sup>なま</sup>だと申しました。まあ「生の現実<sup>なま</sup>」という言葉はちよつとあまりよくないかも知りませんが、詩篇139篇を見ますと、神さまが私たちを知ってくださいる知り方、キリストが知ってくださいる知り方は、我々を審<sup>さば</sup>こうとして知り給うのではなく、活かそうとして知ってくださいるということ。どこへ逃げ回ろうと、追いかけてきて、私を捕えて活かしてください。そういう扱いをなさってくださいる。

## ●神・キリスト讃美の生涯

それがこの詩篇でいいますと、

12 汝のみまえには暗きものをかくすことなく夜もひるのごとくに輝けりなん  
じにはくらきも光もことなることなし

そして、あなたは実に私を素晴らしい姿へと形造ってくださいました。

人間というのは自分を呪うんですね。

「自分はなぜこんなふうに造られたのだろう、自分というのはなんて嫌なやつに造



られたのだろう」

というふうには自己嫌悪に陥ることが多いと思う。自分にはかつてそういうことがありました。それに対してここでは、全く別なことを言っている。

「暗きものをかくすことなく夜もひるのごとくに輝けり　くらきも光もことなることなし」

という。これは絶対次元からの愛の光です。そういう愛の光で見たときに、

13 汝はわがはらわたをつくり 又わがははの胎にわれを組み成したまいたり  
14 われなんじに感謝す われは畏るべく奇しくつくれたり なんじの事跡はこ  
とごとくくすしわが靈魂はいとづばらに之をしれり

あなたは私を母の胎で造ってくださいました。そのお造りくださった在り方がなんと素晴らしいことでしょうか、こう言つて讃めている。

15 われ隠れたるところにてつくられ地の底所にて妙につづりあわされしとき  
わが骨なんじにかくることなかりき 16 わが体いまだ全からざるに なんじ  
の目はやくより之をみ 日々かたちづくられしわが百体の一だにあらざりし  
時にことごとくなんじの冊にしるされたり

主さまのプログラムのなかで造られた私の姿は素晴らしかった。そのプログラム通りにあなたは造ってくださいましたんですね。ああ、なんと素晴らしいことでしょうか。こうやつて、自分を造ってくださいました神・キリストへの讃美がここに表れているように思う。

17 神よなんじのもろもろの思念はわれに宝きこといばかりぞや そのみおも  
いの總計はいかに多きかな 18 我これを算えんとすれどもそのかずは沙よりも  
おとし われ眼さむるときも尚なんじとともにいる…… 23 神よねがわくは我

をさぐりてわが心をしり 我をこころみてわがもろもろの思念をしりたまえ  
24 ねがわくは我によこしまなる途のありやなしやを見て われを永遠のみに  
導きたまえ

神さまが自分を見てくださる見方というのは、審くためではなくて、活かすために、活かそう活かそうとして私を見てくださったって、本当にありがたうございますと。

「考えてみたら、お母さんのお腹の中に造られたその時から、あなたの御思ひは私に注がれて、私を素晴らしい姿へと創り出そうとしてくださったんですね。ただ自分の成長の過ぎ越し方を見たときに、自分で自己嫌悪に陥ったり、いろいろありました。でも、ある時に主さまを与えていただいて、新しい生き方へと引つくり返してくださいました。そして今日の私があります。主さま、ありがたうございます」

と。つまり、自己嫌悪から自己肯定へ。その自己肯定も無条件の自分ではない。主さまに贖われ、新しい生命をいただいて、



「さあ、お前は生きるんだ。われ活くれば汝らも活くべければなり」と仰ったその御言を貫いてくださる。これにいつも、

「ありがとうございます」

と、私はそういう思いでいっぱいなんです。

この副題に、「神・キリスト讃美の生涯を」と書きました。これは私にとっては、主キリストの尊い贖い抜きではありませんことでありました。今もそうですが、

願わくは、すべての人が本当に主さまのそういう御思いと御業を知ってくださって、そして力を得まして、絶望から希望へと、そういうふうな大転換を遂げていただきたい。そういう思いが私の中に強くあります。

それは言葉では伝わらない。では、どうしたらいいか。生き方です。皆様お一人ひとりの生き方。その生き方が人々に光を与え、希望を与え、人を活かす、そういう生き方となっていくんだと思います。

「あなたは どうして、そんなふうにも喜んでいらつしやるんですか？ あなたはいつも どうして、そんなポジティブなんですか？」

「はい、私はかつては、そうではありませんでした。けれども、ある時、主イエス・キリストさまがご自身を私にお示しくださって、私を絶望から希望へと引っくり返してくださいました」

と、そういう思い、告白が非常にごく自然なものとなりました。

## ●「ビフォア」と「アフター」

ここで、前にお話したことを訂正しておきたいことがあるんです。何をお話したかと言いますと、「ビフォア」と「アフター」というタイトルでお話したことを憶えていらつしやるでしょうか。これは化粧品とか何かの宣伝によく使われている。「ビフォア」では、あざや何かがあつたりしているのが、「アフター」ではピカピカに輝いている。

私はそれをもじって、私の「ビフォア」は暗かった。過去を振り返れば後悔ばかりしている。将来を見れば心配事ばかりある。現在は充実というものが全くない。これが私の「ビフォア」だった。「アフター」は、キリストによって新しい生き方を示されて、いわゆるクリスチャンとしてキリストの救いを受ける。それでパツと輝いていくことになると。こんなように申し上げたんです。

それを訂正したい。どこを訂正するかというと、「アフター」に「1」と「2」があつて、アフターの第1段階は苦しかった。これは本当ですよ。なぜかといいますと、「ビフォア」は神さまはいんですから、キリストがいらつしやらないから、自分が自分の主ぬしですよ。自分で「これはよくない」と思ったら、退ける。自分が「かくありたい」と思えば、そのようにやる。そのように、「ビフォア」というのは、自分のいわば価値基準を一応よりど



ころにしながら、昨日の自分よりも今日の自分が

「ちよつとは良くなつたかな、いや、やつぱりあかな」

とか、そんなふうにいけば自分を判断基準にして、「良い自分、悪い自分」とか、「好きな自分、嫌いな自分」とか、そういうようにやつたんです。それが「ビフォア」です。

それに対して、「アフター」は何かというと、前の話では、「アフター」はいっぺんに自分の人生が明るくなって素晴らしくなったという、そういうふうなお話だったかと思います。それを私は訂正します。「アフター」の方が大変だった。

これは絶対にクリスチャンの方々に、あるいは、これからキリストを信じようとなさる方々に言っておきたい。つまり普通なら、「アフター」になったら、もうパツと輝く。しかしそれが、「アフター」になってから厳しくなるんですよ。つまり、今までは

「みんなで渡ればこわくない」

というふうに「みんな」が基準なんです。ところが、「アフター」の基準はそういう基準ではないでしょ。そうするとそこで、「アフター1段階」と「アフター2段階」の二つの段階が次に出てくる。「アフター1段階」は、私にとっては余計苦しかった。つまり今までは、

「そんなことはみんなやっているやん。お前だけではない。みんなやっている、人間ならそれは当たり前や」

と言っていた、「ビフォア」では。ところが、「アフター」は一般の判断基準は基準にならない。神・キリストの目で厳しくみたら、全部アウトなんです。これは私にとって辛かったですよ。本当に逃げ出したかった。だから、禅とか、仏教の本を読んでみたりした。つまり、今までOKだったのが全部通らないんですもの。神・キリストの厳しい判断基準でみたら、全部アウトなんです。

「どこへ行ったらいいんですか。どこへあなたの目を逃れられますか」

と、さっきの詩篇139篇にありました。この139篇は愛の目で見てくださいから、

「どこへ行っても大丈夫だ、お前を私は救い上げてやまないよ」

と、そういう絶対愛ですね。それに対して、私の判断基準はそんなものではありませんから、今まではOKで通っていたのが全部通らなくなる。神さまの厳しい判断基準ではみなアウトですよ。そしたら本当に、

「いやあもう、こんなキリスト信者になってまづかった!」

と思いましたよ(笑)。今までOKだったのが全部通らないもの。いやあこれは辛かったですね。それで、どこからどうやって逃れたか。投げ出したんです。

「全部だめです、主さま、もうあかん! もう全部ゆだねます!」

と。もうゆだねきつたんです。そしたら、

「大丈夫だよ。お前のマイナスは全部、私が引き受けた。お前にはプラスだけを与えたいんだ。それが私の思いだよ。それを受けとれよ」



「はい、主さま、ありがとうございます」

と。「ありがとうございます」と言うほか私にはなかったですね。つまり、別な言い方をしますと、キリストを信じたばかりに、自分を見る目が一段と厳しくなって、今までOKで済んでいたのが許されない。そうしたらもう逃げ出すほかない。そういうところへ追い詰められた。

### ●無条件降伏

その時に、いつか小池先生が講筵された（1965年5月29～30日）。第一番目のお話は「無条件降伏」、翌日午前の第二番目のお話は「中央突破」、そして午後のお話は「決定的勝利」。この三段階のお話は本当に素晴らしかった。つまり、

「先ずは無条件降伏しないとあかん。そのままではあかん」

という。それも一般的基準ではOKであっても、神・キリストの前では通らない。そうすると、どうしたらいいか。主の中に投げ出す。死んだらもう元も子もない。どないする。

「はい、無条件降伏します。主さま、お救いください。私はどうにもなりません！」

と言って投げ出します。それが無条件降伏です。無条件、条件が無いんです。もう絶対に降伏。そうしたら、

「大丈夫だよ」

と言って、道を開いてくださる。それを「中央突破」という。中央突破したときに聖霊を与えられる。そうしたら今度は「決定的勝利」へ展開する。何かそういうお話だったように思うんです。

私という人間はなかなか無条件降伏はしないんですね。「俺は、俺は」と自分を立てる。その「自分を立てる」ことが実は「罪」なんです。無条件降伏することがいいんですよ。しかし、それができない。人間は自我というやつが邪魔して。

要するに、そういうふうは無条件に、

「主さま、私はもうどうにもなりません。私には生命も希望も夢も何也没有せん。

もうだめです。主さま、何とかしてください！」

と、投げ出すんです。あるがままに投げ出す。だめのまま、そのまま投げ出します。そうしたら、主さまは、

「それでいいよ。私はお前のマイナスは全部引き受けたから。お前は無条件に赦されてるんだ。私はお前を活かしたいんだよ」

「はい、ありがとうございます」

と。そして、無条件降伏した時に、聖霊を下さるんですね。

「聖霊をお前に与える。この生命をお前は生きるんだ」

「われ活くれば汝らも活くべければなり」



と。あのヨハネ伝14章19節の言葉をキリストは下さった。

「我は道なり、真理なり、生命なり。我によらでは誰にても父の御許に至る者なし」

と。ということとは、

「我によるならば誰でもが往けるよ」

と言って、十字架で道を開いてくださったわけです。それに対して我々は、

「はい、主さま、ありがとうございます。主さまの道を往かしていただきます」と。それが、

「われ活ければ汝らも活くべければなり」

とキリストが仰ってくださいている姿だと思います。

そして決定的に今度は、神讃美の生涯へと変わっていく。それが今日のタイトルになります。これは結論だけを書いているのが今日のタイトルですね、

「永遠の生命を賜って生きる」

という、この「賜って」というのがいいんです。自分で獲得するのではない。これは賜るんです。賜って、どんな生き方をするのか。その生き方は「神・キリスト讃美」以外にないじゃないですか。神・キリスト讃美というのは、「人を助ける」ということ、「人を救いあげる」ということなんです。神讃美というのはお祈りばかりしているのではない。そうじやなくて、

「私がお前を救いあげた。今度は、お前が人を救いあげる役割を果たすんだよ」

と、使命を下さる。それが生きがいとなってくる。それまでは、自分は自分のためにだけを思っ生きてきた。

「自分がどうすればどうなる、ああなる。自分、自分、自分」

でした。その自分が、

「われ主と共に十字架につけられた。もはや、旧き我生くるにあらず。御霊のキリストわがうちにありて生き給うなり、活かし給うなり」

というふうに、そこで引っくり返った。それが「神・キリスト讃美の生涯」という姿なんです。神・キリスト讃美というのは、何か神さまを、キリストを讃えて讃えてということではない。「人を活かす」そういう新しい役割、使命をいただく。それを喜びとして生きぬいていく。別な言い方をすれば、キリストさまがくつついて一緒にやってくださる。

「二人三脚」という言葉がありますね。

「われと汝は一つなり。私がお前と一緒にあって、父なる神さまが喜び給う生き方をしようじゃないか」

と。「二人三脚」と言ったのはそういうことです。

「はい、主さま、ありがとうございます。私一人では何もできません。けれども、



あなたがそうやって、『私は一緒に歩いていくよ、お前と一緒にだよ』と言つてくださるので、もう大安心です。ありがとうございます」

と。そうでしょ。もし、

「もうお前は救われたんだから、お前一人でやれ」

と言われたら、たまらんですよ。そうじゃなくて、復活のキリスト、御霊のキリストが新しい生命を賜った私と一緒に歩んでくださる。

「われ主と共に十字架につけられたり。もはや、われ生くるにあらず。復活のキリスト、御霊のキリスト、わがうちにありて生き給うなり」

という、あのパウロのガラテヤ書2章20節の告白です。

それが私にとっての「ビフォア」とアフター」です。前に言ったことを訂正するというのは、「アフター」に二段階あるということ。「アフター1段階」は、却って自分を苦しめる。それに対して、無条件降伏しますと、活かしていただける。そういう「アフター1」と「アフター2」の二つあったということです。

それは「神・キリスト讃美の生涯」ということになってきます。

「皆さん、喜んでいますか？」

ということを、誰だったかな、よくそんなことを尋ねる先生がいらつしやったですね。「皆さん、喜んでいますか」と。いや、私は喜べなかつたですよ。「ビフォア」には、もちろん喜びがなかつた。「アフター」も喜べない。「アフター1段階」は却って自分を見る見方が厳しくなつた。前は許されたことが許されない。だから、この「アフター1段階」は逆に苦しかった。逃げ出したかった。それでもう一度、無条件降伏した。

「主さま、もうだめです。どうにもなりません、主さま！」

と言ったら、

「大丈夫だよ、私がお前を活かしてあげる。もう自分自身なんて問題にしなくていいんだよ」

「はい、ありがとうございます」

と。第2段階です。それが私だった。

第2段階がこないと、集会はできませんよ。集会でこうやって話している語り手が喜びの中にいなかったら、どうして聴いてくださる方々を喜びの世界へ導けるのですか。そうでしょ。別な言葉でいえば、

「われ活くれば汝らも活くべければなり」

と、その御言が私に受肉して、キリストの生命をいただいた。

「お前を絶対、活かさないではおかないよ」

と。

「誰でも我にあるならば新しく創られたものだ。旧きは過ぎ去った。見よ、一



切は新しくなりたり」

という言葉もありますように。そうやって旧き我にもちろん死んで、新しく賜った私の第1段階の我、これは逆に苦しくなる。しかし、それを更に突き抜けて、第2段階にきたら、

「無条件に、どんなお前であつても大丈夫だ。私はお前を抱きしめて離さないよ」

という、そういうキリストの御声ですね。この御声が……「私を喜びの世界へ、大安心の世界へ入れてくださった」。

### ●詩篇第103篇

太陽と地球の関係を考えてください。地球は太陽の周りをグルグル回っているそうですね。しかも、太陽の引力に引つ張られて、一定の距離を保ちながらグルグル回っている。キリストさまはどういうお方か。そういう太陽です。私どもは、キリストさまという絶対の生命の太陽であるお方に引つ張られながら、その方の周りを回っているような在り方かも知れません。

要するに、主さま、主キリストという、その絶対なるお方の引力によつて、逃げ出したくなくても逃げ出せない。それがさつきの詩篇の139篇です。

「黄泉に床を設けても、あなたはそこにいらつしやるではないですか。あなたには光も闇も異なることはないじゃないですか」

と、こう言ってますでしょ。139篇の11節を見てください。

11暗きはかならず我をおおい 我をかこめる光は夜とならんと我いうとも<sup>12</sup>汝のみまえには暗きものをかくすことなく夜もひるのごとくに輝けりなんじにはくらきも光もことなることなし

こういう世界へと私どもをキリストさまが連れて行つてくださる。

「主さま、ありがとうございます！」

と、それ以外にお答えのしようがありませんでしょ。

もう一度この139篇を始めから読んで終りにします。

1主よなんじは我をさぐり我をしりたまえり<sup>2</sup>なんじはわが坐るをも立つをもしり又とおくよりわが念をわきまえたもう<sup>3</sup>なんじはわが歩むをもわが臥すをもさぐりいだしわがもろもろの途をことごとく知りたまえり<sup>4</sup>そはわが舌に一言ありとも観よ主よなんじことごとく知りたまえり<sup>5</sup>なんじは前より後よりわれをかこみわが上<sup>6</sup>にその手をおき給えり<sup>6</sup>かかる知識はいとくすしくして我にすぐまた高くして及ぶことあたわず<sup>7</sup>我いずこにゆきてなんじの聖霊をはなれんやわれいずこに往きてなんじの前をのがれんや<sup>8</sup>われ天にのぼるとも汝かしこにいましわれわが榻を陰府にもうくるとも観よなんじ彼処にいます<sup>9</sup>我あけぼのの翼をかりて海のはてにすむとも<sup>10</sup>かしこにて尚なん



じの手われをみちびき汝のみぎの手われをたちたまわん 11暗きはかならず我をおおい 我をかこめる光は夜とならんと我いうとも 12汝のみまえには暗きものをかくすことなく夜もひるのごとくに輝けりなんじにはくらきも光もことなることなし 13汝はわがはらわたをつくり 又わがはの胎にわれを組み成したまいたり 14われなんじに感謝すわれは畏るべく奇しくつくられたりなんじの事跡はことごとくすし わが靈魂はいとつばらに之をしれり 15われ隠れたるところにてつくられ地の底所にて妙につづりあわされしとき わが骨なんじにかくるることなかりき 16わが体いまだ全からざるに なんじの目はやくより之をみ日々かたちづくられしわが百体の一だにあらざりし時にことごとくなんじの冊にしるされたり 17神よなんじのもろもろの思念はわれに宝きこといかばかりぞやそのみおもいの總計はいかに多きかな 18我これを算えんとすれどもそのかずは沙よりもおおし われ眼さむるときも尚なんじとともにおる…… 23神よねがわくは我をさぐりてわが心をしり 我をこころみてわがもろもろの思念をしりたまえ 24ねがわくは我によこしまなる途のありやしやを見てわれを永遠のみにちに導きたまえ

この詩篇139篇は本当に素晴らしい告白、神讃美の告白だと思えます。これを受けて詩篇の103篇を見てください。

### 【詩篇第103篇】 ダビデの歌

1 わが靈魂よ主をほめまつれ わが衷なるすべてのものよそのきよき名をほめまつれ 2 わがたましいよ主を讃めまつれ そのすべての恩恵をわするなかれ 3 主はなんじがすべての不義をゆるし汝のすべての疾をいやし 4 なんじの生命をほろびより贖いだし 仁慈と憐憫とを汝にかうぶらせ 5 なんじの口を嘉物にてあかしめたもう 斯てなんじは壮ぎて驚のごとく新たになるなり…… 8 主はあわれみと恩恵にみちて怒りたもうことおそく仁慈ゆたかにましませり 9 恒にせむることをせず永遠にいかりを懷きたまわざるなり 10 主はわれらの罪の量にしたがいて我儕をあしらいたまわず われらの不義のかさにしたがいて報いたまわざりき 11 主をおそるるものに主の賜うそのあわれみは大にして 天の地よりも高きがごとし 12 そのわれらより愆をとおぎけたもうことは東の西より遠きがごとし 13 主の己をおそるる者をあわれみたもうことは父がその子をあわれむが如し 14 主は我儕のつくられし状をしり われらの塵なることを念い給えばなり 15 人のよわいは草のごとくその栄はのの花のごとし 16 風すぐれば失せてあとなくその生いでし処にとえど尚しらざるなり 17 然はあれど主の憐憫はとこしえより永遠まで 主をおそるるものにいたりその公義は子孫のまた子孫にいたらん 18 その契約をまもりその訓諭を心にとめて



行うものぞその人なる<sup>19</sup> 主はその宝座<sup>みくら</sup>をもろもろの天にかたく置たまえり<sup>すえ</sup>その政権<sup>まつりごと</sup>はよろずのもののうえにあり<sup>20</sup> 主につかうる使者<sup>つかい</sup>よ 主の聖言のこえをききその聖言をおこなう勇士<sup>ますらお</sup>よ 主をほめまつれ

この、

「主につかうる使者<sup>つかい</sup>よ 主の聖言<sup>みことば</sup>のこえをききその聖言をおこなう勇士<sup>ますらお</sup>よ」

とは誰のことですか。皆さんのことですよ。ええ。そうでしょ。皆さんをおいて他に誰がいるんですか。我々はかつては、神さまに逆らうどうしようもない者でした。それが主キリストの十字架の御贖いによって、新しい生命を賜って、こういう103篇の「主につかうる使者<sup>つかい</sup>」になったんですよ。

「主の聖言<sup>みことば</sup>の声をきいてその聖言をおこなう勇士<sup>ますらお</sup>」

に我々は変貌させていただいたんですよ。そうでしょ。そういうふうにくこを讀んでいたきたい。だから、ここで結論は、

「讃めまつれ、讃めまつれ。主をたたえよ」

という讃美ばかりではないですか。

<sup>20</sup> 主につかうる使者<sup>つかい</sup>よ 主の聖言<sup>みことば</sup>のこえをききその聖言をおこなう勇士<sup>ますらお</sup>よ 主をほめまつれ<sup>21</sup> その万軍よ その聖旨<sup>みこころ</sup>をおこなう僕等よ 主をほめまつれ<sup>22</sup> その造りたまえる万物<sup>よろずのもの</sup>よ 主の政権の下なるすべての処にて主をほめよ わがたまし

いよ 主を讃めまつれ

人間だけではない。

「創られている万物すべてよ、主をほめまつれ。わがたましいよ 主を讃めまつれ」と。これが私たちの今の賜っている現実なんです。

そうしたら、今日の題に揭げました、「永遠の生命を主は我々に賜った」。その目的は何か。「神・キリスト讃美の生涯を」貫くこと。別な言葉でいえば、人々をキリストの救いへと導くということですよ。

皆さん、いずれ地上の命が終った時に、天上に導かれて往かれます。そこでは、既に主にあつて召された者たちがみな待つていてくれているんですよ。私はもうすぐそっちへ往きますからね、そう思っている。そうしたときに、主は、

「あなたは地上にある間、どれだけの人に私の救いを伝えてくれましたか？ どれだけの人を私の救いへと導いてくださいましたか、努力していただきましたか？」

と、そういうふうにお尋ねになると思うんです。そのときに、

「いやあ、私は誰もいません」

と、そんなことを言わんでください。

「どこの召団のひとですか？ 牧者は誰ですか？」

と訊かれたら、



「奥田昌道です」

なんて。私は困るではないですか。私を困らさないでください。

そうではなくて主が、

「あなたをそんな素晴らしい姿に導いたのは、導き役になった人は誰ですか？」

「奥田昌道というちよつと変わった人間でした」

なんて、そういうことであつていただきたいんですよね（笑）。

まあ冗談はさておいて、本当に私は今日の筵題に、

「永遠の生命を賜って生きる」

目的は何か。

「神・キリスト讃美の生涯を」

貫くことだと。

「永遠の生命をいただいた。ああ、うれしい、うれしい。万才、ハレルヤ！ お終い」

ではないんです。神・キリスト讃美の生涯を生き抜くということは、

「人々を神・キリストの生命へと導いていく」

という、そういう役割をいただいて、それを使命として生きる。今までは、「自分のため、自分のため」で生きてきた。それを今度は、主キリストが喜んでくださる生き方へと180度引っくり返って、変わった。そうであつてほしい。

それが今日の「永遠の生命を賜って生きる」、副題は「神・キリスト讃美の生涯を」。中身は何か。

「人々をキリストの救いへと導いていく。そういう役割をいただいた。その役割を御霊の主さまが共にあつて果たさせてくださる。それに自分を献げていく。これが私の実は生き方」

です。そして、皆さんもそのようにあつていただきたい。こういう気持ちです。

私の話は以上ですけれども、ここに聖句を掲げました。これをまたのちほど、皆さんでしっかりと味わっていただきたいと思います。これは皆さんの方でやっていただく宿題です。

そして、また新しい年は、本当に主を喜びとし、神讃美、キリスト讃美、一人でも多くの人にキリストの恵みを伝えていく、キリストの生命をわかち与える、そういう使命を果たさせていただきたい。本当にそのように私は願っております。

それでは今日のお話は以上になります。

【聖句】 ヨハネ伝3章16～21節、31～36節。 ヨハネ伝14章19節。 テモテ後書1章9

～10節。 コリント前書15章42～58節。 詩篇139篇、103篇。 ガラテヤ書2章20節。

